

ヨブ記31章3-4節 「私の歩みを数える神」

1A 申し開きの信仰

1B 天の父からの報い

2B 疚しさのない信仰

3B 主に拠る報い

4B 良心に委ねる宣教

2A キリストの血に拠る良心の清め

本文

ヨブ記 31 章を開いてください。私たちは聖書通読の学びでヨブ記を読んでいます、28 章まで読み終わりました。今日は 29 章から 31 章まで読んでみたいと思います。

3 不正をする者にはわざわいが、不法を行なう者には災難が来るのではないか。4 神は私の道を見られないのだろうか。私の歩みをことごとく数えられないのだろうか。

29 章から 31 章は、これまで討論してきた友人との討論において、ヨブの最後の主張になります。友人たちに直接語る口調は終わり、独白のように、また神に対して語ります。自分の思いの全てをここで吐き出します。

ここを読むと、なぜヨブが友人たちの猛攻撃を受けながら、なおのこと自分の潔白さを主張してきたかを理解することができます。彼は本当にすごい人でした。正しく、神を恐れる人でした。しかし、その正しさとは裏腹に今、どれだけ落ちぶれてしまったかを彼は話します。もし、いくらかでも自分が悪いことを行なってそれでこの苦しみに遭っているのであれば、それは自業自得であり、その苦しみに甘んじて構わないのです。しかし、それが見当たらない、これらの苦しみを受けるに値する何かを見出すことができない、だから全能者なる神が残酷にも私を痛めつけているのだ、とヨブは訴えるのです。

友人たちは、ヨブがいかに悪を行なったか、根拠もないのに並べ立てて責めました。それは、これだけの苦しみにあっているのは、それ相当の悪を行なったに違いないという想定に基づいているからです。しかしヨブは、それらのことを行なっていません。むしろ、ヨブは友人と同じように、いやむしろ友人以上に、悪者に対する神の厳しい裁きを信じていたのです。友人に対して、むしろ、「あなたがたはこれだけ私を責め立てているが、その同じ物差しで裁かれたら、本当に耐えうるのか？」という問いかけをしました。

そこでヨブは、自分自身に対して陳述をします。もし、自分がこれこれの悪を行なっていたとした

ら、私がこのようになるようにと宣言していくのです。自分が女性を見て、情欲を抱くようなことがあれば、それ相当の災いがあるであろう、という中で語りました。次に、私が貪りを起こしていたら、私の畑の作物が根こそぎにされるがよい、と言っています。そして姦淫の罪を犯したら、自分の妻が奴隷となってもよい、それは滅びの淵まで焼き尽くす火だ、と言っています。自分が、みなしごに向かって手を振って追い出したら、その腕が肩から落ちて、付け根から折れてもよい、とまで言っています。つまり、神は十分にえこひいきなく、私に対しても悪があれば裁いてほしい、という願いであります。

1A 申し開きの信仰

ここまで言うことのできるの、自分の良心が清く保たれているからです。神が自分の道をことごとく見ておられる、それだけでなく、自分の歩みをことごとく数えておられることを知っているからです。自分は神の前で裸なのです。ヘブル人の手紙 4 章 13 節に、こういう言葉があります。「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」

私たち日本人は、「お天道様が見ているよ。」という言葉をもって、誰も見ていなくても見られていることを知らなければいけないとします。しかし、お天道様も雲が隠れればそれでおしまい、家の中でカーテンを閉めれば、それでおしまいです。しかし、神は私たちの心の襞まで、すべてを見通しておられます。「主よ。あなたは私を探り、私を知っておられます。あなたこそ私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られます。あなたは私の歩みと私の伏すのを見守り、私の道をことごとく知っておられます。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられます。(詩篇 139:1-4)」そして、生まれてから今までの、思うこと、行なうこと、語ることの全てを数えておられます。「あなたの目は胎児の私を見られ、あなたの書物にすべてが、書きしるされました。私のために作られた日々が、しかも、その一日もないうちに。神よ。あなたの御思いを知るのはなんとむずかしいことでしょう。その総計は、なんと多いことでしょう。それを数えようとしても、それは砂よりも数多いのです。私が目ざめるとき、私はなおも、あなたとともにいます。(16-18 節)」ですから、すべてが裸であり、さらけ出されており、この神に対して弁明するのだということです。

ところで、「弁明をする」という言葉は、英訳で読むと“give account”となっています。アカウントとは、会計の意味もあり「会計報告する」「清算する」とも訳すことのできる言葉です。日本語に、「アカウントビリティ」という英語の言葉が、90 年代に日本にも入ってきました。「説明責任」と訳されますが、これでは十分な意味は伝わりません。けれども、98 年から 2003 年まで日銀総裁を務めた速水優(まさる)さんは、クリスチャンでした。彼は、日本にも入ってきたこの言葉について、聖書から来た言葉であるということ、何度となく証しの中で語っておられました。

黙示録 20 章にある最後の審判を言及されました。死んだ人々が復活して、神の大きな裁きの

座において、その行いに応じて裁かれます。「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。(11-12 節)」したがって、他人が何を言おうとも、神の前で申し開きができるかが重要になってくるとのことです。

1B 天の父からの報い

私たち人間は、人と比べながら生きています。人と比べて、それで自分がきちんと行っているかどうかを推し量ります。しかし、それはパリサイ人や律法学者の正しさ、義であると言われたのがイエス様です。「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタイ 6:1-4)」

自分が何か良いことを行なう時に、それを人に見えるように行っていくというのは、人間としてごく当たり前のことです。そして、人からの評価によって自分の価値を確かめます。しかしイエス様は、それはしてはいけなはいとはっきりと言われます。そういうことをすれば天の父からの報いは受けられないと言われます。なぜなら、人から良く見られても、その良く見られたということが報いとなり、天には報いは残されていないからです。

ではどうすればよいのか？ 施しをする時に、右手が左手に知られないようにしなさい、その施しが隠れているためだ、と言われます。また祈る時も、自分の奥まった部屋で入って、戸を閉めて祈りなさいと言われます。しかしそれは、隠すことが目的ではありません。人の前で善行をしてはいけなはいということではありません。人前で祈るなということではないです。そうではなく、隠れたところでも行っていることによって、自分のしていることが天の父に対してであることがはっきりするからです。人からの評価ではなく、天の父からの評価、報いを受けられるからです。隠れたところで行っている善行や祈りに、その人が神に対して行っているのか、それとも人に対して行っているかが明らかにされます。

2B 疚しさのない信仰

私たちは、人からの良い評価だけでなく、悪い評価も気になります。人からの批判が気になってそれで自分を裁く弱さも持っています。ヨブは、まさに友人からその批評を受けましたが、それを主の前でいっさい疚しいことはないと言いましたね。コリント人への手紙第一 4 章において、パウロも

教会の一部の人々から受けていた、ああでもない、こうでもないと言われていました。けれども、パウロは自分を神の奥義の管理者であると言います。

「こういうわけで、私たちが、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。このばあい、管理者には、忠実であることが要求されます。」管理者は、その所有者に対してのみ責任があります。任されたことを忠実に行っているかどうかによって評価がくだされます。同じように私たちも人に対してではなく、本質的には神に対して行っていることによって評定を受けます。

「しかし、私にとっては、あなたがたによる判定、あるいは、およそ人間による判決を受けることは、非常に小さなことです。事実、私は自分で自分をさばくことさえしません。私にはやましいことは少しもありませんが、だからといって、それで無罪とされるわけではありません。私をさばく方は主です。ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。(1コリント 4:1-5)」

パウロは、人から判定を受けていましたがそれは、非常に小さなことであると言いました。これが、自分が否定的な評価を受け、自分を裁いてしまっている時に必要な言葉です。そうした評価は、非常に小さなことなのです。それは彼が独善的になっているわけではありません。そうではなく、むしろ、正しく裁くことのできる方、自分を隅々まで見通して判定される方がおられることを知っているからです。自分が管理者として仕えている主ご自身です。そして、その判定は主ご自身が戻ってこられる時に行われます。私たちがどこまで忠実に主に仕えていたかを判定されます。人に見える形の事柄よりも、むしろ闇の中の隠れた事、そして心の中の動機も探られて明らかにして、判定するのです。

3B 主に拠る報い

主が来られる時に、キリスト者は裁かれます。その裁きは、罪に定められるような裁きではなく、報いを受けるような裁きです。称賛が各人に届くような報いであります。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。(2コリント 5:10)」キリストのさばきの座があります。イエス様が戻ってこられ、私たちが引き上げられ、空中で主と会います。そして天に入りますが、その時にキリストのさばきの座があります。

キリストのさばきの座は、裁判所のような裁きではありません。オリンピックのような金メダルや銀メダルのような賞賛を与えるための審査であります。私たちが地上にこの体で行なったことに対して、主が褒美を与えられるのです。しかし、不純な動機で行なったものは火で焼かれてしまいます。「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、

この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。(1コリント 3:12-15)」

私たちには、良い行ないをする時に唯一、許される動機があります。それはキリストの愛です。「なぜなら、キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです。(新共同訳 2コリント 5:14)」キリストが私たちを愛してくださった、その感動によって、主に対して行なったことのみに対して、報いを主は与えられます。「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。(ヨハネ 14:15)」イエス様の命令を守るのは、全てイエス様を愛している、つまりイエス様の愛を知ってその愛に感動して、応答しているから守るのです。したがって、その他の動機はみな火で焼かれて残らないのです。私たちは果たして、金の材質を用いているでしょうか、それとも木や藁で建物を建ててしまっているでしょうか。

4B 良心に委ねる宣教

したがって、私たちは誰に対して仕えているか？人ではなく、神に対して仕えています。しかし、もちろん生きている、目に見えている人々を通して神に仕えています。神に仕え、それで人に仕えます。したがって、私たちは人に仕えていく時に、その人たちを喜ばせるためではなく、神を喜ばせることに焦点を合わせなければいけません。

使徒パウロのように神の言葉を伝える時に、その集中すべきは相手を喜ばせることではありませんでした。自分に神が良心を与えられたように、相手にも神が良心を与えられており、その良心に神が語りかけてくださることを願って話すのです。「こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務めに任じられているのですから、勇気を失うことなく、恥ずべき隠された事を捨て、悪巧みに歩まず、神のことばを曲げず、真理を明らかにし、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。(2コリント 4:1-2)」神に仕えるにあたり、まず自分自身の生活の中に恥ずべきこと、悪巧みを捨てます。自分自身が神の前で裸にされていることを知り、自分から罪を取り除きます。そして次に、神のことばをまっすぐに語るのですが、その人の良心に推薦するのです。

イエス様は、人に見せるために教えているパリサイ人や律法学者の教えを「パン種」と呼ばれました。パン種とはイースト菌のことであり、それが入れば粉全体が膨らみます。同じように、人の歓心を得るための働きは、全体に広がってしまいます。だから、イエス様は気をつけなさいと弟子たちに言われました。

そしてこう言われました。「おおいかがぶされているもので、現わされないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。ですから、あなたがたが暗やみで言ったことが、明るみで聞かれ、家の中でささやいたことが、屋上で言い広められます。(ルカ 12:2-3)」隠れたもの、覆い隠されているもの、これを放置しておいて、外側だけ良く見せる偽善は、いつか暴かれます。

イエス様は続けて、人を恐れてはいけない、体を殺してもその後何もしない人を恐れるのではなく、死後にゲヘナに投げ込むことのできる方を恐れなさい、と言われました。そして、この方があなたの髪の毛さえも数えるほど気にかけておられることを話しています。そして、イエス様を人の前で認めたら、神もその人を認めると約束されました。神に対する申し開きであります。

2A キリストの血に拠る良心の清め

ですから、私たちが絶えず良心を清く保っていることができるのか？が重要な点です。しかし、いかにして良心をきよく保っていることができるのでしょうか？私たちは、しばしば、毎日のように自分を良く見せようとし、人の評価を気にして、隠れたところで罪を犯し、悪を行なってしまいます。良心が汚れてしまいます。私たちの良心の清めは、私たちの行ないにありません。私たちが一生懸命、自分の良心を清めようとしても、むしろやってはいけないと思うことを行なっています。良い行ないが強迫的になってきます。

あの宗教改革者のルターは、全能なる神の前に自分がいかにして立つことができるのか、あらゆる善行を試み、罪の告解をしてもますます罪意識が増す一方で、強迫的になっていきました。しかし彼が与えられた御言葉が、あの有名なローマ1章17節です。「義人は信仰によって生きる。」行ないという原理ではなく、信仰の原理です。

良心の清めは、行ないではなく、キリストが流された血潮によります。「そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。(ヘブル 10:22)」私たちが、これはしてはいけないと思いながら犯す罪があります。それは「邪悪な良心」と書いてあります。罪によって、自分がしたいと思うことができず、自分が憎んでいることを行なうのです。しかし、キリストはただ一度、すべての罪のためにご自分の体を捧げ、その血を父なる神にお捧げになりました。したがって、私たちの罪は根こそぎ取り除かれ、洗い清められているのです。

したがって、私たちはこの確信をもって神に大胆に近づくことができます。自分自身を神の前に連れていき、自分自身を常にキリストの血によって洗われた者として裸であることができます。「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。(1ヨハネ 1:7)」光の中にいれば、すべてが見えてしまいます。しかし、私たちは恥じることはありません。御子イエスの血がすべての罪から私たちを清めておられるからです。

だから、きよい良心をもって神にお仕えすることができます。ヨブと同じように、大胆に神の前に出ても、疚しいことがなくなるのです。神から隠れようとするのは、やめましょう。この方から隠れているものは元々ありません。罪を告白し、罪を捨てれば、主は豊かに赦し、不義からあなたを清められます。